

学校の喧噪は若者のエネルギー！

もうすぐ暑い季節がやってきます。梅雨が明ければ夏の風物詩として親しまれている蝉の音が街中に響き渡ります。カー一杯に生きている証を表現していることは十分理解しつつも、燦燦と照りつける日差しと一緒に、全身で浴びる大音量は、暑さを増幅させるようです。

夏が過ぎると今度は一変して、秋の虫たちの共演が始まります。奏でる羽音が夜通し聞こえても、なぜか心地よさが涼秋の夜長を演出します。

音と言えば、私が小学生の頃、朝もやの中に響く納豆屋さんの声「なっと、納豆〜♪」や、夜の遅い時間にやってくる「チャララ〜ララ、チャララララ〜♪」の屋台を引いたラーメン屋が吹くラッパの音は、たとえ早朝や多くの人が寝静まっている真夜中であろうとも、なぜか嬉しくなったものです。もうずいぶん見かけなくなりましたが、夕方には、どこからともなく紙芝居のおじさんが現れます。拍子木を叩く音に誘い出されるようにあちらこちらから子供たち集まると瞬く間に大声で燥ぐ元気な声が広場を包み込んでいきました。割り箸に巻き付けられた水飴を白くなるまで練り続け、何度も修正された跡が残る板紙の絵を夢中になって見ていました。

今思うと、季節を感じる虫の音をはじめ商売や子供たちの声に至るまで、日常生活はたくさんの賑やかな音で囲まれ、活気に溢れていたと感じます。

令和6年5月30日（木）、青空の中、本校体育祭が盛大に開催されました。開会式の挨拶で朝礼台からグラウンドを見渡すと、二〇〇〇を超える生徒の瞳から沸々とした熱量が私に向かって放たれていました。精神論は甚だ時代遅れだと分かってはいましたが、痛いほど突き刺さる生徒の視線に私の心も高ぶってしまい、思わず「気合い、根性、ど根性で勝負だ！」と叫んでしまいました。生徒の心に火をつけたかどうかは定かではありませんが、瞬く間にグラウンドが喧噪に満ち溢れ、向き合っただの話声すらも聞き取れないほど会場が興奮の渦に包まれました。



デジタルだ、αだと言われる世代の高校生は、物静かで大人しく、「これからの時代を任せられるのか心配だ。」と揶揄する声も聞かれます。しかし、体育祭で見た本校生徒が本気で勝負し、一喜一憂する姿は、これこそが次世代を担う若者のエネルギーであると確信するのです。

楽しさを身体いっぱい表現し、仲間と肩を組みながら声がかれるまで大騒ぎする生徒を目の当たりにし、日本の教育は、まだまだ捨てたもんじゃ無いと感じずにはいられませんでした。

私は校長として、普段は、やかましいと感じる生徒の声も、見方を変えればこんなに元気な若者がいると伝えたい。私たち大人は、このエネルギーによって今も将来も支えてもらっている。私たちがこのエネルギーを否定するようなことがあれば、それは、私たちの生き方を否定するのと同じだと感じるのです。なぜなら、元子供だった私たちも、若い時に熱量を大人社会に発散させてもらったからです。

風薫る五月晴れの中、盛り上がり足りないぞ！と、生徒の興奮する声が終始学びの匂いとなって大成高校の元気を空高く舞い上げていました。

令和6年6月